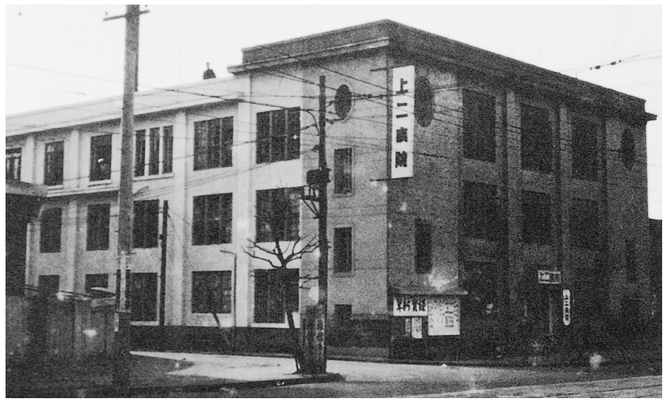
大阪中央医療生協

大阪の民主医療運動の草分け



創設時の上二病院

上二病院創立15周年記念式典

上二病院（1970－2002年）全景

上二診療所の誕生と病院化

コープおおさか病院の前身であるうえに病院の歴史は、中央区上本町二丁目にあった高洲病院を関西民主会館として借り受け、一九四九年四月に上二診療所が開設されたことに始まります。上二の名前は上本町二丁目に由来するものです。初代所長には古川健三医師が西淀病院から赴任し、事務長には峠一夫氏が着任しました。この時期大阪の民主医療機関は十三診療所と西淀病院の二つのみでした。診療所の開設翌年、「光健康を守る会」が発足し、無料健康相談、医療懇談会や社会保障を守る運動に積極的に取り組み、公害反対闘争などの運動を通じて一九六九年には「光生活と健康を守る会」と名称を変更しました。

＊

また開設翌年には関西民主会館を改修し、「真の人民による人民のための病院を」「市の中心部に立派な設備と高い技術を備えた中央病院を」をという地域、民主団体の要望に応え三月に上二病院として発展しました。病床三八床、職員数は三八名、初代院長には桑原英武医師が就任しました。内科、小児科で出発した病院はその後眼科、産婦人科を開設し、無痛分娩にも取り組みました。一九五三年五月には八七床に増床し、甚大な被害がでた北九州、和歌山、伊勢湾の風水害にも支援を行っています。

＊

上二病院は病院化以来、都心部における民医連の拠点病院として、働く人々の健康を守る取り組みをすすめ、冷蔵植皮、冷蔵歯牙再植、小児麻痺生ワクチン、インフルエンザワクチンなどの新しい医療、災害支援や三池争議などの医療救援活動、社会保障充実の運動、労災職業病や公害病などに幅広く取り組みました。

財団法人から生協法人への変更

一九六八年十二月には上二病院の法人格として医療法人財団関西勤労者医療協会が設立されましたが、新病院建設を進める一方、借入利息が収益の八・四％にもなり、経営問題が深刻化します。広範な基盤をもった医療住民運動組織への模索、経営体質の改善、資金定着の展望から、最も適した組織形態として生協法人の検討が進められました。十月二六日、府立青少年会館で生協設立総会が開かれ、医療法人財団は解散し、大阪中央医療生活協同組合へと受け継がれました。初代専務には伊藤伝一氏が就任しました。これを機に「光生活と健康を守る会」も医療生協班組織に再編成されました。

新病院の建設

病院建物が高洲医師の個人所有であったため一九六八年、賃貸借契約終了にともない自前の建物を持つ決断に迫られます。ところが、経営的にとても自己資金を準備できる力量はありませんでした。それでも民主団体をはじめ地域の強い願いと支援を受け、土地確保に全力をあげることになります。努力が実を結び中央区上町一丁目六番地の種田邸跡で、四六七坪という広大な土地が確保されました。ここは難波宮朝堂院の外廊に位置しており、天武朝、聖武朝の貴重な遺跡が発掘されたため、工事開始が若干遅れて一九六九年五月に新病院建設が始まりました。自己資金が不足していたため、土地、建物、設備、材料のほとんどを大衆的な借入金でまかなうという異例な事業でした。この事業は上二病院を支援する府下のみならず全国の力を結集して実現したのです。

＊

しかし、経営問題は引き続き深刻で、賃金も民医連内では最下位、夏期一時金も出せませんでした。一九七二年医療生協第二回総会では個室料徴収の方針が決議され、民医連内で波紋を呼びました。当時は個室料と成人病ドックによる現金収入が経営改善の糧となっていたのです。

＊

さらに赤字克服策としてコープ商品の販売も行われ、婦人活動家を中心に班が確立し組織が急速に拡大していきましたが、小口中心の物品販売だけに手間はかかるが採算がとれずついに一九七四年撤退を余儀なくされました。しかし、事業を続けてほしいという地元の強い要望が今の大阪いずみ市民生協設立の流れへと続いたのです。

＊

この年、桑原院長が過労で倒れ、大阪民医連による一年間の医師派遣が実現しました。その後院長も復帰し組合員拡大も一年で二千名近い仲間増やしを達成するなど広がりを見せ、労働組合との共同の取り組みも強まり、少しずつ経営が好転しはじめました。

＊

一九七五年には生協薬局を開設、その翌年に府下四番目となるCTの導入を行い、大東市に協立診療所をオープンさせています。

大阪中央医療生協

北河内地域で初めての民主診療所となった当時の協立診療所
（現大東四条畷保健生協）

第二期増改築工事と診療所

一九七六年将来計画委員会が発足し、民医連の長期計画に基づき市内民医連拠点病院としての役割と診療所群の展開を具体化したものでした。城東鶴見保健生協はじめ他生協との交流が盛んになり、患者紹介、医師対策などでの協力共同が進みました。

＊

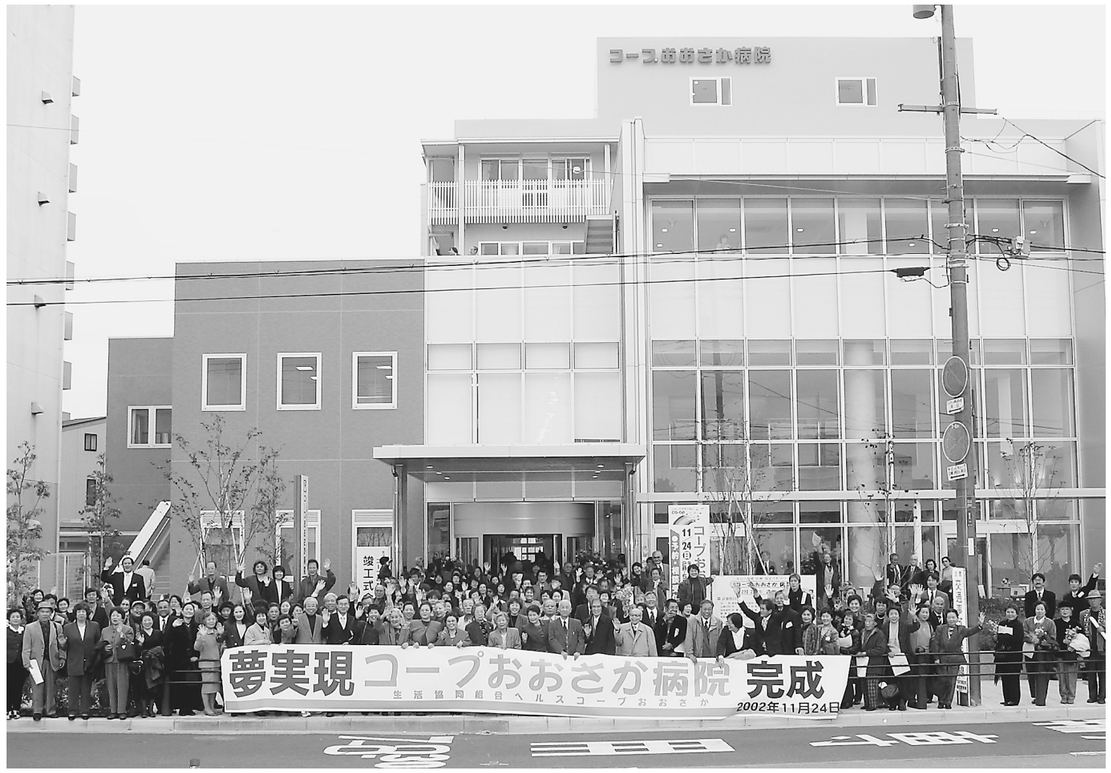
一九七八年十二月には上二病院第二期増改築工事が竣工しています。第一期工事でベッド数百十一床を一七五床に増床し、ＩＣＵ（集中治療室）も四床設置しています。一九八〇年には生協森の宮歯科、一九八二年に病院泌尿器科を開設しました。一方で医師不足による深刻な累積赤字をかかえていた協立診療所が閉鎖されます。しかし地域住民の強い存続の意志により原田氏が病院を離れ、大東四条畷保健生協として新たなスタートすることになりました。一九八七年には「東成に診療所を」という願いにこたえ、いまざと診療所を開設しています。一九八九年「上二病院」から「うえに病院」に名称変更を行いました。

病院の老朽化、経営困難と法人合併、新病院の建設

一九九〇年代に入り、大阪中央医療生協の収支構造は悪化の一途をたどり、累積欠損が一九九一年には六億八千万円、自己資本比率マイナス二五・八％になりました。この構造は改善されずに続きます。しかも医師体制は引き続き深刻で、民医連の支援とともに大学医局からも派遣を受けながら病棟医療を継続させてきました。ようやく消化器医、循環器医が着任し、心臓カテーテル検査などの新しい医療の展開が進み、外科も支援により新しい体制が生まれ、大腸肛門分野でめざましい発展を遂げます。泌尿器科も複数医師体制となり、ＥＳＷＬ（体外衝撃波結石破砕術）を導入し大阪でトップクラスの手術件数となりました。こうした中で、大腸ガンや前立腺ガン健診の分野で組合員による取り組みが飛躍的に進みました。

＊

一九九八年ようやく累積欠損を解消する基本計画が策定されました。計画に基づき病棟再編、救急室の設置、血管造影装置の更新、ヘリカルＣＴの導入、一九九九年院外処方箋の発行、一般病棟の一部療養病棟への転換、介護保険導入に伴い介護保険室の設置を行っています。こうした背景のもとで二〇〇〇年四月には「ヘルスコープおおさか」が発足し、新病院建設へとつながったのです。



コープおおさか病院完成記念（2002年11月24日）

ヘルスコープおおさかができるまで

合併以降のとりくみを新病院建設運動に焦点をあてながら多面的に、ヘルスコープのできるころからいままでをふりかえります。

うえに病院の経営危機克服を四生協の団結で

「地域から心臓病で亡くなる人と、癌で手遅れの患者は出さない」を合い言葉に、循環器内科、消化器内科をメインに、病棟の再編、血管造影装置の更新、ヘリカルＣＴを導入する「医療構造の転換」を一九九八年から本格的に行いました。一九九九年院外処方箋の全面発行と一病棟六〇床を療養病棟に転換し、介護保険の実施にともない介護保険室を設置、サービス提供にも積極的に取り組みました。

＊

この過程で資金繰りをめぐって重大な経営危機が発生しましたが、合併を目指した四生協の団結した力、組合員と職員の協同の力でこの経営危機を乗り切り、病院単独で黒字を出すまでになりました。

新病院建設運動へ

鶴見三丁目の自動車整備工場の移転跡地を確保し、新病院建設運動は始まりました。どんな病院にするか医療構想が論議される一方、新病院の地域に医療生協をつくる活動が総力をあげて展開されまし